

<研究報告>

事なかれ主義のニック・キャラウェイ

— 『グレート・ギャツビー』の主人公兼語り手に関する一考察—

金子史彦 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：フィッツジェラルド, 『グレート・ギャツビー』, ニック

1. はじめに

筆者は過去にスコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) 著『グレート・ギャツビー』 (Great Gatsby) の研究をし、多数の研究論文: 「楽園願望が生んだ幻想: ニックのアメリカン・アイデンティティ追及」 (『ことばと文化: 静岡県立大学英米文化研究室紀要』 No.1 1997年2月 pp. 111-123), “The Argument over the Myth of Success: The Comparison between Martin Eden and The Great Gatsby” (『Studies in Comparative Culture: 日本比較文化学会学会誌』 No.48 2000年3月 pp. 1-9), “Novels Plunging a Scalpel into ‘Normal’ America’: A Comparative Study of The Great Gatsby and The Crying of Lot 49” (『信州大学教育学部紀要』 No.120 2008年3月 pp. 39-49) 等を書いてきた。そして、この作品の主人公はジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) ではなく登場人物兼語り手であるニック・キャラウェイ (Nick Carraway) であり、ニックが自分の願望を投影してギャツビーをグレートなアメリカンヒーローに仕立て上げ、文明に毒された東部にはもはや古き良き時代のアメリカンヒーローは存在しなくなってしまったと結論付けた、というニックの足掻きの話であると一貫して述べてきた。

そのように今まで執筆した論文ではニックのギャツビー及び当時のアメリカに対する態度に焦点を当ててきたわけであるが、本稿はニックのそれ以外の部分、彼の事なかれ主義的傾向を探求しようというのが目的である。

2. ニック自身の認識

ニックが事なかれ主義であるというのは彼自身が認識しているということが、語り手としてのニック本人の言葉から読み取れる。作品の冒頭で、彼は父親の忠告にも影響されて “I’m inclined to reserve all judgements” (Fitzgerald, p. 1) という性質を身に着けたと言っている。その結果多くの人々、全く知らない人からも秘密の悩み事等を打ち明けられたりしたのだが、その秘密がいよいよ深い部分になりそうになるのを感じると聞くのを避けたと述べている: “I was privy to the secret griefs of wild, unknown men. Most of the confidences were unsought – frequently I have feigned sleep, preoccupation, or a hostile levity when I realized by some unmistakable sign that an intimate revelation was quivering on the horizon” (Fitzgerald, p. 1)。

つまり他人の事情に深入りしたり、ましてや他人の困ったことやもめ事に深く首を突っ込んで巻き込まれるようになっていたりするのを避けるという自分の性質を、ニック自身が自覚しているのだ。この事なかれ主義の性質は、この作品中で随所にニックの行動原理として登場する。

3. ニックの考えていることと行動の相違

ニックは頭の中では色々な問題に気付いてショックを受けたりすることも度々ある。しかし、まるでもめ事を避けるかのように、行動には移さないのである。

例えば彼がまたいとこのデージー・ブキャナン (Daisy Buchanan) と彼の大学時代の同級生で大金持ちのトム・ブキャナン (Tom Buchanan) の夫妻の豪邸を初めて訪問した時、トムに愛人がいることを聞き、その愛人が夕食時にまでブキャナン家に電話をかけてきた時、心の中での反応は“my own instinct was to telephone immediately for the police” (Fitzgerald, p. 17) だったという。不倫・浮気のような私事で警察が出てくるというのも不思議な発想ではあるが、それだけ彼はショックを受けたのであろう。彼にとってトムが女遊びをするなどというのは驚くべきことでもなく、むしろトムに愛人がいることを知っていながらデージーが何もしないことがショックだったようだ: “It seemed to me that the thing for Daisy to do was to rush out of the house, child in arms – but apparently there were no such intentions in her head. As for Tom, the fact that he ‘had some woman in New York’ was really less surprising than that he had been depressed by a book” (Fitzgerald, p. 22)。しかしニックはデージーに考えを聞いたりアドバイスをしたりということは全くない。

トムに半ば強いられて彼の愛人であるマートル・ウィルソン (Myrtle Wilson) と会った時、マートルの妹のキャサリン (Catherine) に、彼女の姉のマートルとトムはお互いに今の結婚相手に満足していないため本当なら今すぐにでもお互いに離婚してトムとマートルは結婚したいのだがデージーが離婚を認めないカソリックであることがその障壁になっている、という話を聞かされた時などはさらに顕著である: “‘You see,’ cried Catherine triumphantly. She lowered her voice again. ‘It’s really his wife that’s keeping them apart. She’s a Catholic, and they don’t believe in divorce.’ Daisy was not a Catholic, and I was a little shocked at the elaborateness of the lie” (Fitzgerald, p. 35)。マートルは真剣に夫のジョージ・ウィルソン (George Wilson) と離婚してトムと結婚したいと考えているのに対し、トムにとってマートルは慰み者に過ぎない。しかし恐らくトムはマートルに対し、妻がカソリックのため中々離婚できないがいつか必ず離婚して君と一緒にいるというようなことを言っているのであろう。ニックはデージーがカソリックではないことを知っており、そのことからマートルはトムに騙され弄ばれているに過ぎないということを理解しショックを受けた。しかしニックはこの時も何の行動も起こさないのである。その場で「デージーはカソリックではないよ」と言うことは勿論、後にマートルにそのことを教えたりもしない。つまり語り手としてのニックは読者にトムの嘘のからくりを教えるが、登場人物としてのニックはその

事なかれ主義の『グレート・ギャツビー』の主人公兼語り手

ような行動をしない。結果、読者はマートルに対しある意味同情の気持ちと優越感を感じながら読み進めていくことになる。

さらに滑稽なのが、ニックがギャツビーの誘いを受けてメイヤー・ウォルフシェイム (Meyer Wolfshiem) なる裏の世界の大物らしき人物と昼食を共にするためにニューヨークに向かう道中である。車を運転しながらギャツビーは自分の半生をニックに聞かせるのであるが、その話があまりにも荒唐無稽でニックも笑いそうになったりして、いったい真実なのかどうかわからなくなる。その話の中でギャツビーは “I am the son of some wealthy people in the Middle West” (Fitzgerald, p. 68) と言う。そしてニックとの間で次のようなやりとりがある: “What part of the Middle West?” I inquired casually. ‘San Francisco.’ ‘I see.’” (Fitzgerald, p. 69)。サンフランシスコは中西部ではなく西部である。アメリカ人、とりわけ正真正銘の中西部出身の人間であるニックにそれがわからないわけがない。しかしここでもニックはギャツビーのこのとんでもない間違いというにはあまりにも可笑しい矛盾を指摘せず、納得した振りをするのであった。

このような事から、ニックはもめ事を避ける事なかれ主義の傾向が強い人物であるということがわかる。

4. ニックの女性関係に現れるその傾向

ニックの事なかれ主義は彼の女性関係にも表れている。言い換えれば彼は女性と深い関係になったり、女性関係で面倒になることを避けるのである。先ず彼はトムとデイジーに婚約したというのは本当なのか聞かれた時:

Of course I knew what they were referring to, but I wasn't even vaguely engaged. The fact that gossip had published the banns was one of the reasons I had come East. You can't stop going with an old friend on account of rumours, and on the other hand I had no intention of being rumoured into marriage. (Fitzgerald, p. 21)

と、いわば交際していた女性と結婚という親密になることから逃げるのが東部に来た理由の一つである、と明かしている。また、彼はニューヨークでも会計係の女性と短い関係を持ったが、いわば彼女の兄ともめ事になることを避けるためにその関係を終わりにしたことを独白している: “I even had a short affair with a girl who lived in Jersey City and worked in the accounting department, but her brother began throwing mean looks in my direction, so when she went on her vacation in July I let it blow quietly away” (Fitzgerald, p. 60)。

Gatsby でニックと女性の関係で一番詳細に描かれているのは当然ジョーダン・ベイカー (Jordan Baker) とのそれであるが、Lois Tyson (ロイス・タイソン) は上述の二つのニックの女性関係がいわばジョーダンとのその前座のような役割を果たしていると述べている: “That Nick's fear of intimacy is not limited to his relationship with Jordan is suggested by his two

previous romances” (Lois Tyson, p. 40)。ニックはジョーダンと何度もデートを重ねたのは事実である。ニック自身何度もそのことに言及しているが、特に注目すべきは“mostly I was in New York, trotting around with Jordan and trying to ingratiate myself with her senile aunt” (Fitzgerald, p. 107) という部分である。ジョーダンの唯一の身内である年老いたおばに気に入られようとしたというのは、上で見た会計係の女性と付き合っていた時に彼女の兄と陰悪な関係になりそうになったため彼女と別れたという過去から学習したのであろう。もめ事を避けるニックの性質がここでも現れている。それではニックはジョーダンとは本気で親密になろうとしていたのであろうか。彼がジョーダンとの関係を深めていこうとしている自分について次のように分析している:

Her grey, sun-strained eyes stared straight ahead, but she had deliberately shifted our relations, and for a moment I thought I loved her. But I am slow-thinking and full of interior rules that act as brakes on my desires, and I knew that first I had to get myself definitely out of that tangle back home. I'd been writing letters once a week and signing them: 'Love Nick,' and all I could think of was how, when that certain girl played tennis, a faint moustache of perspiration appeared on her upper lip. Nevertheless there was a vague understanding that had to be tactfully broken off before I was free. Everyone suspects himself of at least one of the cardinal virtues, and this is mine: I am one of the few honest people that I have ever known. (Fitzgerald, p. 63)

この故郷に残してきた先ず片づけなければいけない問題というのは上で見た、結婚するつもりはないのに婚約したという噂が立ってしまった、という女性のことと考えて間違いはない。実際にはニックは既にその女性にほとんど愛着を持っていないのは、彼女について考えつく全てのことが彼女がテニスをするときにうっすらと上唇の上に口ひげのような汗をかくことだけだということからも明らかである。しかし、ニックは未だに週に一度彼女に“Love Nick”と署名してまで手紙を書き続けているのだ。彼女のほうから未だにニックに執着しているため関係を清算するまでジョーダンとの親密な関係に進めないというのではなく、逆にニックがジョーダンとの件を先送りにする理由を作るために故郷の彼女との関係をわざとダラダラと続ける努力をしているとしか解釈できない。さらに注目すべきは、自分のことを最も honest な人間のうちの一人であると述べているところである。後にニックが故郷に帰る前にジョーダンに別れを告げに言った時、ジョーダンは“I mean it was careless of me to make such a wrong guess. I thought you were rather an honest, straightforward person. I thought it was your secret pride.” (Fitzgerald, p. 189) とニックを非難するのだが、それに対してニックは“I'm thirty . . . I'm five years too old to lie to myself and call it honour.” (Fitzgerald, p. 189) と答えた。結局のところニックは以前に言った自分の筋を通す性質がジョーダンと親密な関係を築くことの障害となっているということが事実ではない、と白状

事なかれ主義の『グレート・ギャツビー』の主人公兼語り手

してしまったようなものである。タイソンは“In his relationships with women, Nick is a master of avoidance and denial” (Tyson, p. 40) と述べている。

一方ニックは想像の中で女性と関係することを楽しんでいる:

I like to walk up Fifth Avenue and pick out romantic women from the crowd and imagine that in a few minutes I was going to enter into their lives, and no one would ever know or disapprove. Sometimes, in my mind, I followed them to their apartments on the corners of hidden streets, and they turned and smiled back at me before they faded through a door into warm darkness. (Fitzgerald, p. 60)

想像の中なら女性はニックの望むように動いてくれる故に決してもめ事に巻き込まれたり面倒なことになったりすることは無い。ニックの事なかれ主義は彼の女性関係にもよく表れているのである。

5. ギャツビーに対するニックのスタンス

そのような事なかれ主義のニックがギャツビーにあれ程入れ込むようになったのは一見不自然にも見える。しかしよく検証していくとニックの行動はギャツビーに関しても一貫していることがわかる。彼がギャツビーからジョーダンを通じて頼み事をきいてくれないかと言われた時“I was sure the request would be something utterly fantastic, and for a moment I was sorry I'd ever set foot upon his over-populated lawn” (Fitzgerald, p. 71) と面倒な事に巻き込まれそうだと感じ、嫌な気分になったのである。しかしギャツビーの頼みというのが、デイジーと偶然を装って再会し自分の豪邸を彼女に見せるためにニックにデイジーをお茶に招待してほしい、というごくごく簡単なものであるのを知って“The modesty of the demand shook me.” (Fitzgerald, p. 83) と衝撃を受け頼みを聞き入れることに決めたのである。しかしギャツビーがその返礼としてニックに紹介してきた大金を手に入れる仕事の申し出は、当初彼が予想していたギャツビーの頼みのようなものだと判断して断っている: “I realize now that under different circumstances that conversation might have been one of the crises of my life. But, because the offer was obviously and tactlessly for a service to be rendered, I had no choice except to cut him off there.” (Fitzgerald, p. 88)。

そしてニックは自分の願望を投影してギャツビーをグレートで古き良き時代のアメリカンヒーローに仕立て上げるわけだが、それはギャツビーの死後に本格化したのであった。そしてそのギャツビーの死後のギャツビーの理想化の過程においてもニックの事なかれ主義は見受けられる。さらに面白いことに、ニックのそういった事なかれ主義がギャツビーの理想化に結び付いているのだ。例えば彼がトムに会った時、無視し、トムに呼び止められ握手を求められると、初めはトムがジョージ・ウィルソンにマートルをひき逃げしたのはギャツビーだということを教えたため結果としてギャツビーがウィルソンに殺されたと

金子

詰め寄ったが、ギャツビーはひき逃げの報いを受けたのであり自業自得なだけだというトム的主張を聞くと：

‘I told him the truth,’ he said. ‘He came to the door while we were getting ready to leave, and when I sent down word that we weren’t in he tried to force his way upstairs. He was crazy enough to kill me if I hadn’t told him who owned the car. His hand was on a revolver in his pocket every minute he was in the house –’ He broke off defiantly. ‘What if I did tell him? That fellow had it coming to him. He threw dust into your eyes just like he did in Daisy’s, but he was tough one. He ran over Myrtle like you’d run over a dog and never even stopped his car. (Fitzgerald, p. 190)

本当はマートルをひき逃げした時に車を運転していたのはギャツビーではなくデイジーであるということを知っていたのだが、そのことは口にせずトムと握手をした。心の中では次のように考えていたにもかかわらずである：

I couldn’t forgive him or like him, but I saw that what he had done was, to him, entirely justified. It was all very careless and confused. They were careless people, Tom and Daisy – they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made . . . (Fitzgerald, p. 190)

実はひき逃げ犯はギャツビーでなくデイジーであるということを公言しなかったのは、ここでトムとのもめ事や警察の捜査に深く関わることを避けたかったという事なかれ主義も当然理由の一つだろう。しかしそれとまた違うレベルの事なかれ主義も大きな理由のはずだ。ギャツビーの殺害とジョージ・ウィルソンの自殺の事件についての警察の捜査の時、マートルの妹のキャサリンは“her sister was completely happy with her husband . . . her sister had been into no mischief whatever” (Fitzgerald, 174) と明らかな嘘の証言をした。なぜキャサリンがそのような偽証をしたのかは不明であるが、そこにはトムによる圧力や買収がちらつく。しかしそれは作品内には全く証拠となるものが無い。それはともかくとして、ニックはキャサリンの証言が全くの嘘であることを知っているはずなのに、それを警察に言わなかった。逆に“*But all this part of it seemed remote and unessential. I found myself on Gatsby’s side, and alone.*” (Fitzgerald, p. 174) と、現実世界でギャツビーの死のことがどう扱われているかには無関心で、むしろギャツビーの秘密を独り占めにしているような心中を明らかにしているのである。ひき逃げに関してギャツビーは冤罪であるということをも同じ文脈で解釈できるのではないか。

ギャツビーの死後、ニックによってギャツビーは古き良きアメリカンヒーロー、時代に

事なかれ主義の『グレート・ギャツビー』の主人公兼語り手

よって、特に文明に毒された東部では存在することができなくなったグレートな存在へと祭り上げられていく。ギャツビーの生前からニックはギャツビーに共感し始めてはいたが、本格化したのはやはりその死後である。作品中でのニックによるギャツビーへの賛辞はそのほとんどが語り手としてのニック、つまりギャツビーの死後に彼のことを肯定的に描いているわけである。それは結果的に彼のギャツビーとの最後の対話となった、ギャツビーが殺された日の朝の別れ際の描写によく表れている:

We shook hands and I started away. Just before I reached the hedge I remembered something and turned around. 'They're a rotten crowd,' I shouted across the lawn. 'You're worth the whole damn bunch put together.' I've always been glad I said that. It was the only compliment I ever gave him, because I disapproved of him from beginning to end. (Fitzgerald, p. 164)

つまりニックはギャツビーの死後、彼を自分の想像の中でいわばニック版のギャツビーを創り上げグレートな存在として崇めるようになったのだ。ここで気が付くのは、前章でニックが現実の女性と親密な関係になることは避ける傾向があり、むしろ想像の中での女性関係を楽しんでいるという事との共通点である。故人になってしまったギャツビーであればニックの頭の中だけに存在するわけであり、ニックの理想像であり続ける。もちろん前述の女性達と異なりギャツビーはニックとかなり実際の関わりが有ったわけであるし、死後であっても新事実が発見されたりして現実のギャツビーが彼の理想像とは全く異なる人物であったことが露呈されてしまうことは全く考えられないわけではない。それ故ニックは上で見たように情報の間違いを公言して警察の捜査に深く関わり、現実のギャツビーから目を背け、自分の想像の中に引きこもって理想のギャツビー像を侵されることを避けたのではないか。彼の事なかれ主義、現実の人間との親密な関係を避けるといった行動原理がギャツビーをグレートな存在にすることと上手く結びついたのである。

6. まとめ

事なかれ主義、親密な人間関係を築かない性質、こういったものはある特定の人物をグレートと称える事とかけ離れているように見える。しかし本稿で見てきたようにニックはそれらを結び付けることに成功しているのである。つまり現実のギャツビーと親密にならず面と向き合うことを避けたが故に、ニックはギャツビーを永遠にグレートな理想像として称え続けることが可能になったのだ。そしてこれは偶然成功したのかも知れないが、そうとも言い切れないものがある。それは彼がギャツビーの頼みを聞いてデイジーとの再会のセッティングをした時、念願の再会を果たしたギャツビーを観察してニックは次のように述べた:

金子

As I went over to say good-bye I saw that the expression of bewilderment had come back into Gatsby's face, as though a faint doubt had occurred to him as to the quality of his present happiness. Almost five years! There must have been moments even that afternoon when Daisy tumbled short of his dreams – not through her own fault, but because of the colossal vitality of his illusion. It had gone beyond her, beyond everything. He had thrown himself into it with a creative passion, adding to it all the time, decking it out with every bright feather that drifted his way. No amount of fire or freshness can challenge what a man can store up in his ghostly heart. (Fitzgerald, p. 102)

つまり現実のデイジーを目の当たりにしたギャツビーにニックは幻滅感を見て取ったのだが、それはデイジーに原因があるのではなく、ギャツビーの側に原因があるというのだ。ギャツビーは理想的なデイジー像を彼の想像の中で創り上げてしまっており、現実のデイジーはどうしてもそれと比べたら物足りないものがある。そして引用した箇所最後の文にあるようにニックはその現実が想像には敵わないというのを普遍的な事のように定義づけている。そして実際にその後現実のデイジーはギャツビーの想像上のデイジー像を裏切り続けていく。ギャツビーが実際に自分の理想化したデイジーは全くの彼の独りよがりであったと事実を受け入れて夢を諦めたのかどうかは不明のままであるが、現実のデイジーはギャツビーの想像していたようには動いてくれなかった。ギャツビー自身の気持ちはともかく、ギャツビーの想像したデイジー像が少なくともニックには全くの間違いであった事がわかったのは、ギャツビーがデイジーと親密な関係を築こうとしてしまったからである。

一方ニックがギャツビーを想像の中で理想化するのはギャツビーの死後に本格的に始まった。幸か不幸かこれではギャツビーと親密な関係を築くことは絶対に不可能である。もしギャツビーが殺されなかったらニックはどうしていたかは決してわからない。しかし第5章で見たように、ギャツビーの死後、彼に関する間違っただけの事実、それも彼がひき逃げ犯であるといったような彼にとって不名誉な事実でも公に正そうとせず、現実世界のギャツビー殺害事件の扱われ方にも興味を失い自分の中に引きこもって理想のギャツビー像を創ることに没頭したということは、ギャツビーの事例から現実の親密な関係が想像を壊す危険性を学んだ可能性は十分に考えられる。こうして見ると、ニックの事なかれ主義がギャツビーをグレートにしたのは必然だったとも言えるのである。

引用文献

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Penguin, 2011.

Tyson, Lois. *Critical Theory Today*. New York: Garland Publishing, 1999.

(2017年10月12日 受付)
(2017年12月14日 受理)